

# 高校野球のテレビ中継とラジオ中継における

## アナウンサーおよび解説者の発語数の比較

- なぜ暑苦しく感じるか -

柳川リハビリテーション学院 第1学年 山口 信

### 【研究を始めるにあたっての疑問点】

同じ甲子園の野球中継でもテレビ中継とラジオ中継の与える印象は大きく違う。テレビ中継はクーラーの効いた部屋で麦茶でも飲みながら見るのがふさわしいのに、ラジオ中継の方は海の家で寝っ転がったりかんかん照りの防波堤で釣りをしながら聞くのにふさわしい。一言で言ってラジオ中継の方が五月蠅く暑苦しいがいかにも夏らしい。こうした違いはなぜ起こるのか。音量の関係かと思い、同程度に音量を調整してみたが、やはりラジオ中継の方が五月蠅く感じる。この違いはアナウンサーの発語数に由来するのではないかと考えた。

### 【研究の目的】

高校野球のテレビ中継とラジオ中継の印象の違いをそれぞれのアナウンサーおよび解説者の発語数を比較することにより分析する。

### 【研究の方法】

高校野球の同一の試合について、テレビ中継とラジオ中継を同一時間録音し、アナウンサーおよび解説者の発話の形態素を数え、数を比較する。

### 【事前の予想】

- (1)ラジオのアナウンサーの方がテレビのアナウンサーよりも二倍程度発語数(形態素の数で考える)が多いただろう。
- (2)テレビの解説者の方がラジオの解説者よりも二倍程度発語数(形態素の数で考える)が多いただろう。
- (3)アナウンサーと解説者の発語数(形態素数)の比はテレビに比べてラジオの方が大きいだろう。

### 【結果】

録音はいずれも豊田大谷高校対智弁和歌山高校の試合、九回表先頭バッターが打席に入るところから試合終了のサイレンまでの17分22秒。

[NHK テレビ]

アナウンサーの発語数(形態素数) - 594語(34.2語/分)

解説者の発語数(形態素数) - 398語(22.9語/分)

二人合計の発語数(形態素数) - 992語(57.1語/分)

アナウンサー：解説者 - 1.49：1

## [NHK ラジオ]

アナウンサーの発語数（形態素数）	- 2,341 語（134.8 語 / 分）
解説者の発語数（形態素数）	- 463 語（26.7 語 / 分）
二人合計の発語数（形態素数）	- 2,804 語（57.1 語 / 分）
アナウンサー：解説者	- 5.06 : 1

## 【比較】

アナウンサーの発語数（形態素数）	- テレビ：ラジオ=1 : 3.94
解説者の発語数（形態素数）	- テレビ：ラジオ=1 : 1.16
二人合計の発語数（形態素数）	- テレビ：ラジオ=1 : 2.83
二人の1分当たりの発語数（形態素数）	- テレビ：ラジオ=57.1 : 161.5

## 【考察】

実際に分析してみると、事前の予想のうちで当たったのは(1)のアナウンサーの発語数と解説者の発語数についてだけであった、テレビではアナウンサーと解説者が掛け合いで中継を進め、発語者の交替がいわば阿吽の呼吸で行われるのに対して、ラジオではほとんどの解説者はアナウンサーが水を向けたときにだけ話していた。予想の(2)については、ラジオの方が語数が多いということは容易に予想がついたが、印象としてはせいぜい。倍程度だと思っていたが、実際には、アナウンサーについてはラジオの方が4倍近く多く発語していた。ただし、同じことの繰り返しが非常に多くこれが発語の多さとともにラジオ中継の暑苦しさの一つの要因となっているように思われた。(2)についてはまったく予想外れで、むしろラジオの解説者の方がテレビの解説者よりも発語数が多かった。これはアナウンサーの非常に多い発語の合間に行われることを考えれば驚異的である。解説者はしゃべりのプロではないので、速く要領よくしゃべろうとして却って意味不明の語や不明瞭な部分があった。

以上をまとめると、テレビ中継は対話形式で淡々と進められるので、視聴者は自分の興味のある場面でのみ画面を注視すればよいのに対して、ラジオ中継では、アナウンサーの繰り返しの多い膨大な発語量とときおりはさまる解説者のあせった口調を半ば強制的に聞かされるため、五月蠅いという印象を受けるものと思われる。

なお、応援団や観客の歓声について、テレビよりもラジオの方が音を大きく拾っているような印象があるが、音量を測定する装置が身近にないため、今回はこの点については研究しなかった。